

# Interview

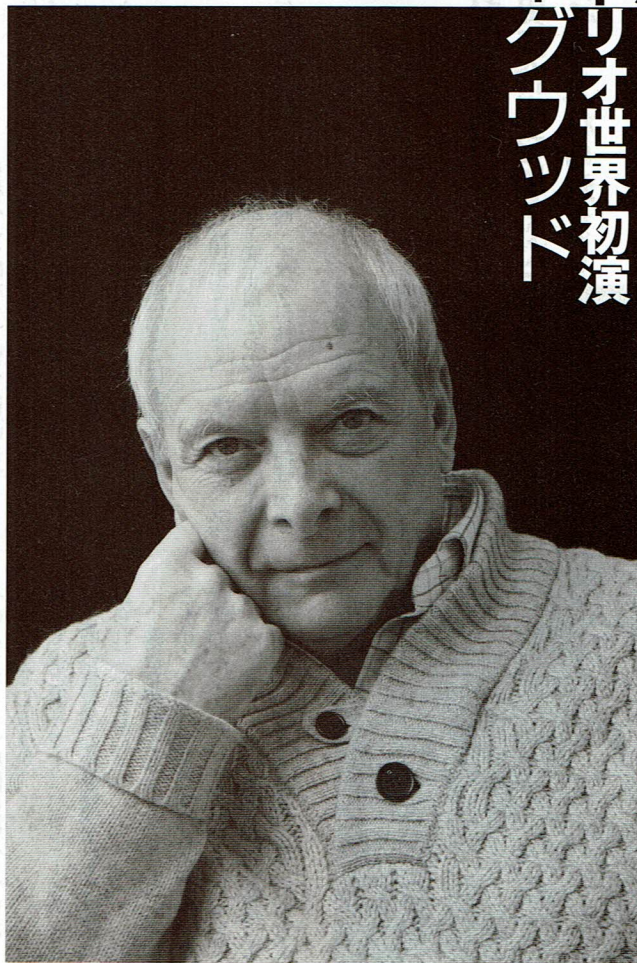
## ヘンデル研究の世界的権威 自身の校訂譜によるオラトリオ世界初演 クリストファー・ホグウッド

指揮

ききて・文 三澤寿喜

写真 山本博道

この度ホグウッド氏の来日に際し、ヘンデル研究者である三澤寿喜氏にインタヴューをお願いしました。いわずと知れたヘンデル演奏及び研究の第一人者であるホグウッド氏と、ヘンデルに関する多くの著書を執筆し、ヘンデル・フェスティバル・ジャパンを主宰する三澤氏、そんなヘンデルのスペシャリストであるお二人ならではの、掘り下げられたヘンデルの最新線をお届けします。(編集部)



クリストファー・ホグウッド氏は演奏と研究を極めて高い次元で両立させている稀有の音楽家である。「モーツァルト交響曲全集」や「メサイア」の録音と、「ヘンデル」や「宮廷の音楽」の著書の印象が強過ぎ、我が国ではとかく古典派以前の音楽の専門家と捉えがちである。しかし、氏は指揮においては「古楽」へのこだわりはなく、研究はルネサンスから現代まで多岐にわたっている。

今回はヘンデル・フェスティバル・ジャパンの招聘により、ヘンデルのオラトリオ《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》の指揮のために来日された(2010年2月13日、浜離宮朝日ホール)。佐竹由美、波多野睦美、辻裕久、牧野正人、キャノンズ・コンサート室内合唱団&管弦楽団。

インタビューは公演前日の2月12日に行なわれた。通訳は井上由裕佳子さん。ホグウッド氏はお酒落で、ウィットに富む

濃厚なイギリス紳士であるが、今日のヘンデル・オペラの上演に話が及ぶと、遠慮のない辛口批評が飛び出した。

### 個々の奏者を尊重し、全員参加がモットー

明日がいよいよ本番ですが、これまでのリハーサルを進め方を拝見していて、演奏者一人ひとりの表現を最大限尊重しているように見受けられました。ホグウッド(以下H) そのとおりです。

交響曲のような大編成の管弦楽の場合には必ずしもそのような訳にはいかないの

ですが、各楽器の優れた奏者が集まった、このような小編成の古楽オーケストラの場合は、一人ひとりのそなえている技術や表現を的確に見極め、まとめていくことが重要だと考えます。

特にナチュラル・ホルン、ナチュラル・トランペット、フラウト・トラヴェルソ、チェロ、ポジティブ・オルガンなど、アリアを彩るオブリガート楽器奏者に対して、そのような姿勢が窺われたように思いますが。

H 必ずしも「常に」という訳ではありません。時には、様式上、技術上の観点

から、別の解釈や奏法を提案することもありました。しかし、その際でも、個々の奏者は一人ひとりが独立した奏者であることを尊重し、あくまで提案するという姿勢をとりました。今回はおよそ50名の奏者(器楽27、合唱22、独唱者4)での演奏ですが、このような演奏会は、指揮者一人の音楽であってはいけないと思っています。自分だけの解釈で演奏をしたければ、私はハーフィシコードの独奏をします。もし、二人で演奏するとなれば、そこには二通りの個性があり、二通りの解釈が生まれ、それをいかに一体化し、

調和させていくのが重要な問題となりま  
す。そして、50人のアンサンブルであ  
れば、全員がその作業に加わっていくこ  
とになります。

### 古楽もモダンも同様の存在

次に経歴についてお尋ねします。氏  
は1960年代にロンドン古楽コンソ  
ートに加わり、1973年には自らエン  
シエント室内管弦楽団を設立しました。こ  
のように、音楽のキャリアを古楽で開始  
し、当初は古楽演奏にほとんどの精力を  
傾注しましたが、その後、古楽以外にも  
活動を拡大し、現在では、現代音楽にま  
で至る幅広いレパートリーをもつ指揮者  
として活躍されています。指揮するオー  
ケストラも古楽からモダン・オーケスト  
ラへと拡大し、レパートリーもバロック  
や古典からロマン派、近現代へと拡大し  
たのはいつ頃のことだったのでしょうか？  
また、そこには何か契機があつた  
のでしょうか？

H それは大きな誤解です。私は古楽か  
ら始めてモダンへとレパートリーを拡大  
したわけではありません。私は16歳でスト  
ラヴィンスキーを演奏しましたし、私が  
最初に所属したオーケストラもアカデミ  
ー室内管弦楽団で、モダン・オーケスト  
ラでした。私はそこに10年間所属し、そ  
の間、東京にもツアーで訪れています。  
ここでは、バロック以外のレパートリー  
も数多く演奏していました。古楽のエン  
シエント設立後もそれと並行して、19  
80年にはロスアンジェルズ交響楽団の  
指揮者も務めていました。これはまった

く古楽オーケストラではなく、モダン・  
オーケストラです。これもよく誤解され  
るのですが、私が古楽の専門家なのは  
なく、オーケストラのメンバ―が古楽の  
専門家なのです。指揮者としての私にと  
って、古楽オーケストラもモダン・オー  
ケストラもまったく同様にやりがいいの  
ある仕事です。

研究においても実に幅広い活動を展  
開されています。現在、ヘンデルの新全  
集のために、《聖セシリアの祝日のため  
のオード》の校訂作業に取り組んでいま  
すが、そのほかに取り組んでいる研究課  
題は何でしょうか？

H 現在、校訂作業中のものはパーセル、  
ジェミニアーニ、メンデルスゾーン、モ  
シエレス、レオポルト・コジエルフ、マ  
ルティヌー、ストラヴィンスキーなどで  
す。

### ヘンデルの実像 ヨーロッパでの認識

幅広い研究・演奏活動を行なってい

ることを承知の上で、あえての質問です  
が、ヘンデルは今後も重要な研究・演奏  
の対象であり続けるのでしょうか？  
H もちろんです。

ヘンデルは、日本では名前は有名な  
が、相変わらず《メサイア》だけの作  
曲家であり、実像が十分に知られてい  
ない作曲家ですが、それはヨーロッパでも  
同じでしょうか？

H いえ、違います。ヨーロッパでは、  
モーツァルトが《レクイエム》だけの作  
曲家ではないことが知られてきたよう  
に、ヘンデルについても実像がかなり知  
られるようになってきていると思います。

特に、何世紀の間、闇の中にあつ  
たヘンデルのオペラが、この10年ほどの  
間にヨーロッパの多くの劇場のレパート  
リーとして定着するようになってしまし  
たが、その理由はどこにあるとお考えで  
しょうか？

H この10年ではなく、もっと早く、恐  
らく20〜30年前からのことだと思います。  
この間、オペラ自体が、その官能性のゆ

えに、人気が高まってきました。そのお  
陰で、ヘンデルのオペラも採り上げられ  
るようになってきたのだと思います。

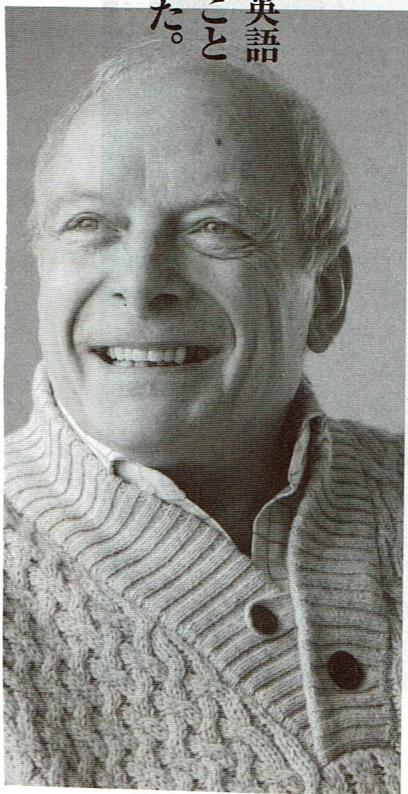
### ハッピー・エンドは 当時の慣習的な作劇構造

ヘンデルのオペラは当時のイタリ  
ア・オペラ・セリアのハッピー・エンド  
の慣習を厳格に守っていますが、時に、  
このハッピー・エンドはドラマ上の弱点  
であると言われます。ヘンデルは自らも  
台本作成にある程度関わっていたと思わ  
れます。ということは、ヘンデル自身も、  
そのようなドラマ展開に満足していたと  
いうことでしょうか？

H そのとおりです。ハッピー・エンド  
は当時の慣習的な作劇構造として受け入  
れられていました。

厳格な慣習をもつオペラ・セリアは  
ともかく、その慣習からは自由であった  
はずのヘンデルのオラトリオにおいて  
も、ハッピー・エンドの慣習は色濃く影  
響を与えているように思います。たとえ

ヘンデルは宗教的な題材による英語  
の台本を用い、更に合唱を加えたこと  
で当時の聴衆に受け入れられました。



ば、世俗的な内容ですが、《ヘラクレス》は、ヘラクレスの非業の死で終わるか、もしくは、デージャナイラの狂乱の場面で幕を閉じれば、後期ロマン派のオペラ同様の悲劇的な結末となりますが、それをせず、最後に若者同士の結婚という、幸福な場面を詠定して幕を閉じます。また、《イエフタ》では、聖書の記述を無視してまで、本来いけにえとなるべき娘を救済し、ハッピー・エンドとします。ハッピー・エンドは当時の時代精神と解釈して良いのでしょうか？

H そのとおりです。ヘンデルは18世紀の劇場習慣を尊重していました。当時の劇場の観客は幸せな気分が家路につきたかったのです。これはオペラやオラトリオだけに限ったことではなく、演劇においても同様でした。シェイクスピアのいくつかの悲劇、たとえば《リア王》でさえ、ハッピー・エンドになるよう、翻案されていたのです。

——今回、指揮する《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》は、本来、ミルトンの詩によって構成される部分は、「陽気」と「ふさぎ」が論争する第2部までですが、ヘンデルの台本用に、C・ジェネンズが新たに第3部として「中庸」を加え、論争に決着を付けました。これも一種のハッピー・エンドなのでしょうが。

H それは分かりません。「陽気」と「ふさぎ」を対照付けるミルトンの思想には何も問題はないのですが、18世紀的思想として、なにか解決をもたらす必要があり、「中庸」が付加されたのだと思います。



2010年2月13日、浜離宮朝日ホールでの公演。  
写真提供 ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

——この第3部の付加はヘンデル自身が提案したとされます。また、第3部に含まれる二重唱と終曲合唱は、ヘンデル作品中、屈指の名曲とされています。それにも関わらず、彼がこの第3部を気に入らず、実際の上演では《聖セシリアの祝日のためのオード》と差し替えて上演したのはなぜでしょうか？

H それも謎です。単に、歌手が、第3部より、《聖セシリアの祝日のためのオード》の方を歌いたと言ったのかも知れません。第3部の音楽が素晴らしいのは間違いありません。また、第3部が長すぎたということでもありません。なぜなら、《聖セシリアの祝日のためのオード》は《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》の第3部よりもっと長いのですから。したがって、原因は歌詞にあると考えざるをえません。つまり、第1部と第2部を構成するミルトンの素晴らしい詩と比較すると、ジェネンズが新たに付加した第3部「Moderato 中庸」の歌詞は、ヘンデルには moderatissimo（あまりに中庸過ぎて、凡庸）と映ったのではないのでしょうか。

### 憂うべきは 今日の滑稽な演出

——ヘンデルは元々オペラ作曲家でしたが、それが行き詰まった時、オラトリオへと方向を転じました。ヘンデルは可能であれば、それらのオラトリオもオペラのように演技を付けて上演したかったのではないかと考えられます。このことについてどうお考えでしょうか？

**H** それはあり得ません。ヘンデルはお金がなくなつたので、衣装や演技の必要な、上演経費の嵩むオペラを止め、安上がりなオラトリオに転じたのですから。しかし、彼は歌手や器楽奏者を抱えていました。オラトリオはヘンデルの発明ではありません。ただ、彼が大々的に作曲するようになったということです。彼は宗教的な題材による英語の台本を用いさらには、賢明にも合唱を加えたことで、当時の聴衆に受け入れられました。これはイギリスのアンセムの伝統を取り込んだものです。

—— 今日、ヘンデルのオラトリオを、オペラのように演技や衣装を付けて上演することがありますが、このような上演についてはどうお考えでしょうか？

**H** 意味がないと思います。合唱団は舞台上で、ほとんど何もすることがありません。このことひとつとっても、オラトリオの演技付き、衣装付き上演は意味がありません。

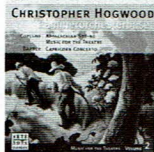
—— ハレのヘンデル・フェスティバルで、《ヘラクレス》の演技付き、衣装付



①ストラヴィンスキー：バレエ音楽《フルチネツラ》  
②幻想曲《花火》、ラヴェル：ラ・ヴァルス、他  
南西ドイツ放送so①アー  
リーン・オージェ(S) □バ  
ート・キャンビル(T) ゲロ  
ルフ・シェダー(Bs) クリ  
ストファー・ホグウッド指  
揮②シルヴァン・カンブル  
ラン指揮  
録音：①1985年11月②  
2007年2月、5月(以上L) >  
[Hänssler@93237] (海外  
盤)



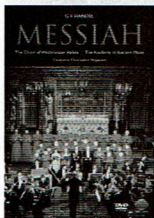
ヴィヴァルディ：フルート  
協奏曲集op.10, 他  
スティーン・フレスト  
ン、マイケル・コブレイ  
(ブロックフレーテ) クリ  
ストファー・ホグウッド指  
揮 エンシエント室内o, 他  
録音：1976年、80年 >  
[Decca@4803582] (海  
外盤)



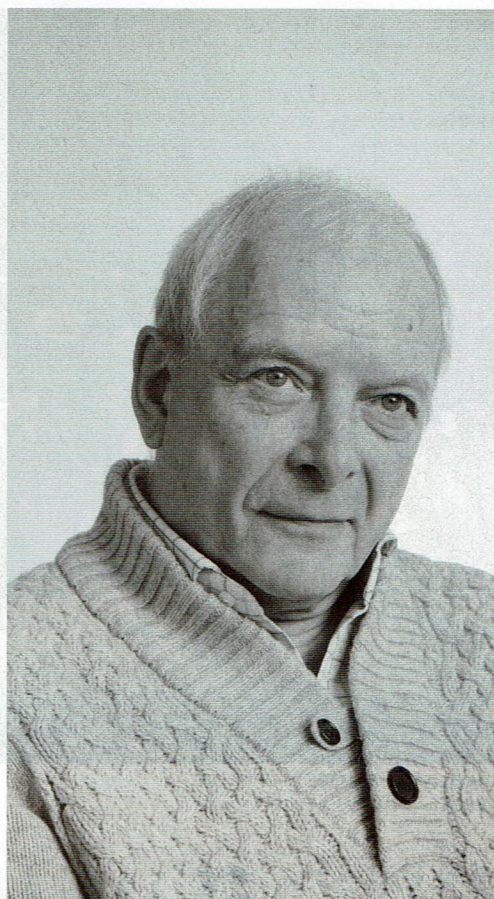
コーブラント：バレエ音楽  
(《アラチアの春》(1944  
原典版)、《劇場のための  
音楽》、他  
クリストファー・ホグウ  
ッド指揮バーゼル室内o  
録音：2005年8月 >  
[Arte Nova@828765069  
32] (海外盤)



モーツァルト／交響曲全  
集  
クリストファー・ホグウ  
ッド指揮 エンシエント室内o  
録音：1978年～85年 >  
[Decca@452496 (19  
枚組)] (海外盤)



ヘンデル：オラトリオ《メ  
サイア》全曲  
ジュディス・ネルソン、エ  
マ・カークビー(S) キャロ  
ライン・ウトキンソン(A)  
ポール・エリオット(T) デ  
イヴィッド・トーマス(Bs)  
ウエストミンスター大聖  
堂聖歌隊、クリストファ  
ー・ホグウッド指揮エンシ  
エント室内o  
録音：1982年1月 >  
[Warner Classics@06  
30178342] (海外盤)



## Christopher Hogwood

1941年、イギリスのノッティンガム生まれ。1960年よりケンブリッジ大学で学び、ラファエル・ブラーナやグスタフ・レオンハルトなどに鍵盤楽器を師事する。その後、アカデミー室内管弦楽団でチェンバロ奏者として活動。1973年にはエンシエント室内管弦楽団を設立、指揮者としても活躍する。同楽団と、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲全集を含め、200以上もの録音をしている。その他にロスアンジェルス交響楽団の指揮者を務めるなど古楽からモダンまで幅広いレパートリーを持っている。現在はエンシエント室内管弦楽団名誉音楽監督。そしてヘンデルの研究をはじめとする音楽学者としても世界的な権威と言える存在である。また、現在も世界各地で演奏活動を行なっている。

き上演を観ましたが、私には大変、滑稽なものに見えました。

**H** 悲しむべきは、そのような滑稽な上演を観て、何も知らない聴衆は、ヘンデルがなにか間違いを犯しているのではないかと勘違いしてしまうことです。これは、あくまで劇場側の発想であることを誰かが聴衆に教えずにはなりません。

—— ヘンデルのオペラの上演においても、昨今、あまりに過激なモダン演出が流行しています。それらについてはどのように感じていらっしゃいますか？

**H** 稀に良い演出もありますが、ほとんどは酷いものです。これは演出家のエゴに原因があります。ヘンデルは大変エゴの強い人間でした。しかし、今日の演出

家のエゴに比べれば、ヘンデルのエゴは無に等しいでしょう。演出家がヘンデルの音楽を白無しにしています。そもそも、当時は演出家という存在すら無かったことを思い起こすべきです。

—— ハレのヘンデル・フェスティバルでも観るに堪えないヘンデル・オペラの上演があり、一般聴衆はもとより、ヘンデル研究者達も皆、辟易としています。聴衆は皆、皆異口同音に「音楽は素晴らしい、演出が酷いので、目をむつていた」と言っています。

**H** それが当然の策というものでしょう。しかし、これ以上、不平を言うのは止めておきましょう。なんと言っても、ヘンデルの音楽が素晴らしいことに変わりはない、我々には「目をむつむ」という対抗手段があるのですから。